

ニュース

韓国で国際養蜂シンポジウム開催

1998年11月3～5日、韓国蚕糸昆虫研究所で国際養蜂科学シンポジウムが開催された。同研究所が蚕糸研究所からの改組にともなって昆虫・環境部門が新設され、この8月から発足したのを記念したものであった。同部門ではマルハナバチの大量飼育も手がけており、これからが楽しみである。当研究施設から松香教授が参加し、日本の養蜂について紹介した。そのほかFAO（イタリア）からLim博士、ブラジルからPark博士、米国からPeng博士などアジア人の国際的な活躍が目立った。さらにオーストラリア、ニュージーランド、ポーランドからの参加者による講演があった。

「ニホンミツバチ

—北限の *Apis cerana*—」刊行

当研究施設佐々木教授の著になる掲題の書籍が刊行される。192ページの3分の一を占めるカラー写真はほとんどが著者撮影の野生のニホンミツバチ。開発によって悪化する環境の中で、たくましく生き延びるニホンミツバチの生態を生物学者の目でありのままに紹介している。

スズメバチの放映

10月26日放映の日本テレビ「スーパーテレビ、情報最前線—殺人鬼スズメバチが空を舞う！人を襲う！—」の番組で、猛禽類ハチクマの雛が、スズメバチの幼虫や蛹を餌とする貴重な映像について、当研究施設の小野正人助教授の見解が説明された。

訃報 渡辺 孝氏

岐阜市、渡辺養蜂場代表の渡辺孝氏が、8月13日、肺炎のため76歳で逝去された。御尊父寛氏との共著である「近代養蜂」は、初心者や

また専門家においても必携の本であり、「ミツバチと人間」、「ミツバチの文化史」、「ミツバチの文学誌」など文献を丹念に収集し、まとめ上げたミツバチ関連書を著している。本誌2巻2号に「日本における旧式養蜂の歴史」のご寄稿をいただいたほか、18巻3号の岡田名誉教授米寿記念号には、「交誼50年」と題して、岡田名誉教授と玉川大学でのミツバチ研究に熱いメッセージを送っていただいた。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

訂正 本邦でのノゼマ病記録

前号のミツバチの病気特集で、ノゼマ病について、国際ミツバチ研究協会の蜂病白書(Matheson, 1993)で“情報なし”となっていたため、日本では未確認としましたが、罹病記録が北岡茂雄氏(月刊ミツバチ(1958)11:208-213)によって報告されています。また養賢堂刊行の「獣医微生物学」(1989)にも記載がありますのでご参照下さい。関係者の方にはご迷惑をおかけいたしました。訂正してお詫び申し上げます。

編集後記

畜産生物化学安全研究所の迫川氏ほかにはアメリカ腐蝕病について寄稿いただいた。前号の特集記事とあわせて読んでいただきたい。カナダでのアピモンディアまで10か月、現地ではそれこそ蜂の巣をつついた騒ぎでOtis博士からの記事や写真もすべてインターネットを利用してやっと間に合わせた。郵便(Snail mail=カタツムリ便)で送られるのを今か今かと待つよりは、毎日催促したりされたりの方が動きが見えていいのだが、いかにもゆとりがない。今号には異質な記事を集めた。料理、教育、芸術といった文化的な側面でミツバチに接して心にゆとりを持ちたい。予想以上に好評な「ミツバチの知恵」に続いて、いよいよ期待の「ニホンミツバチ」も登場。関連書籍もこのところ急に増えたので、越冬の準備を終えたら暖かい部屋で読書もいいだろう。(純)